

第4節 会津地方出土挽物碗・皿の変遷

前節で沼ノ上遺跡の漆器の年代観に触れたが、本節では、会津地方全体の出土漆器や木製碗皿類の様相について述べる。しかしながら、髹漆技術など科学分析を行ったものは少なく、多くは共伴遺物や周辺の様相を加味した様式論となることを断っておく。対象とする時代は中世全般としたが、行論上その前後の時代を一部含んでいる。

会津地方の漆器はいうまでもなく「会津漆器」として有名であるが、その歴史を回顧すると多くは木地師も含めて江戸時代以降の記述に終始する（福島県1912・日本漆工協会1984・渡邊1989・会津若松市2003）。また、福島県内における考古学的な変遷案としては仲田茂司の編年が示されているが（仲田1993・1996・1999）、その後の出土数の増加もあり、ある程度の再整理は必要であろう。

1. 古代（9～11世紀代）

古代の漆器は会津若松市矢玉遺跡（会津若松市教育委員会1999a）・上吉田遺跡（福島県教育委員会1990a）のほか今回報告の高堂太遺跡などで出土している。ともに時期は9世紀代と考えられる。この時代は灰釉・緑釉陶器（瓷器）模倣の浅い刳物皿や盤状を呈する鉢が主体を占める。このほか、碗も認められるが、数的には少ない。矢玉遺跡出土の碗は平高台で口縁部が広がる器形で、越州窯系青磁碗の模倣と推定される。この形態の碗は12世紀の陣が峯城跡の碗に系譜がつながると推定される。なお、同時期の県内遺跡としては福島市御山千軒遺跡の出土資料がある。刳物皿は会津地方出土のものと共通性が高いが、東北地方でも類例の少ない土師器模倣の碗や鉢などが出土している（福島県教育委員会1983）。御山千軒遺跡などに比して、会津地方のそれは漆が塗られる比率が高い。

10世紀代～11世紀代の資料は明確でない。会津地方以外では白河市佐平林遺跡の資料が認められる（福島県教育委員会1996a）。井戸から出土したもので、共伴遺物から時期は10世紀代とされている。この柱状高台は器高が低く、古代的なものと解されよう。

2. 古代末～中世初頭（12世紀代）

平安時代末期の漆器は会津地方で近年多く出土しており、その様相が明らかになっている。会津坂下町陣が峯城跡の資料は12世紀前半～中葉の火災による一括資料である（会津坂下町教育委員会2005）。すべて内外面黒色系漆で碗が多く、皿が少ない特徴を有する。器形的には厚い底部から体部にかけてやや開く器形が大半を占め、口縁部は外反するものと素口縁のものがある。同様に高台部も削りで一段高くするものの他に、平底のものも一定量認められる。このほかに外面に三条の隆線を造作した鉢や合子、盤なども出土している。また、喜多方市御前清水遺跡からは概期の荒形が出土している（山都町教育委員会1985）。なお、同様な荒形は福島市弓手原A遺跡でも出土し、その製作復元を実施している（福島県教育委員会1996c・仲田1999）。これによれば山間地で伐採→割り→木取りまでを実施し、乾燥した荒形を居館などに搬入して挽物に加工するという生産工程が想定されている。陣が峯城跡から出土した槍鉋はそれを傍証している。

総じて、会津地方における当該期の漆器は碗が主体を占める。御前清水遺跡出土の荒形も碗が多い。それとは逆に、かわらけは皿が多い。このことから両者の補完関係があったものと推測される。それに対して、福島市弓手原A遺跡出土の荒形は皿形が多い。これが地域性なのかどうかは判断し兼ねるが、12世紀代の会津地方ではこのような食膳形態だったと推測されようか。

3. 中世前半期（13・14世紀代）

中世前半期（13・14世紀代）の漆器は会津地方では数が少ない。わずかに今回報告する沼ノ上遺跡や喜多方市内屋敷遺跡、会津若松市赤井遺跡で出土したのみである。

内屋敷遺跡の資料は土坑から漆器碗2点が出土した。器形的には沼ノ上遺跡の碗と共通し、うち1点には外面に稜が認められる。材質は2点ともヒノキである。共伴遺物は認められないが、本期に含まれる可能性が高い（塩川町教育委員会2004）。

赤井遺跡の資料はその全体の器形を伺えないが、沼ノ上遺跡1号溝跡の資料と同様内外面黒色系漆の碗である。外面に朱漆による漆絵（銀杏と思われる木葉文・松葉ないし秋草）が施されており、このほか31号土坑から荒形5個体が出土している。おのおのの遺構から共伴遺物はないが、遺跡全体からは青磁碗Ⅱ類や青白磁合子、大戸窯の13世紀前～中葉の遺物が出土している（会津若松市教育委員会2004）。

会津地方外の地域では、郡山市荒井猫田遺跡でまとまった資料が出土している。遺構としてまとまったものは少ないが、「南の町」1～6次および12・13次調査区出土漆器は15世紀代の資料も含まれる可能性が高いが、遺物の大半は13世紀～14世紀前半代を示す（郡山市教育委員会1998・2001）。次に触れる安子島城跡3号井戸跡出土漆器よりは前段階と考えられる。

13世紀代の特徴は、内外面黒色系漆の在地と思われる深く大振りな碗に加えて、器壁が薄い漆絵の漆器碗が認められることであろう。後者は低い高台部から丸みを帯びながら内彎する口縁部に至る資料が多く、高台の断面形は三角形を呈するものが多い。なお、鎌倉に特徴的なスタンプ文が施された漆器が郡山市良耕地A遺跡から出土している（郡山市教育委員会1985 ただし未見）。このことから県内でも少量ながら搬入されていたと推測される。

会津地方における14世紀代の資料は、沼ノ上遺跡出土資料に限られる。外面黒色系漆・内面赤色系漆で、高台があるものとなないものが存在する。これと似た資料は郡山市安子島城跡で認められる。安子島城跡3号井戸跡からは龍泉窯系青磁碗Ⅳ類、古瀬戸後Ⅱ期の天目茶碗などとともに漆器碗が2点出土した。2点とも外面黒色系漆・内面赤色系漆の資料で、高台部は沼ノ上遺跡同様箱形を呈する（郡山市教育委員会1993）。

14世紀代の特徴は、内面赤色系漆の資料が大半を占める。全体の器形は出土例が少なく判然としないが、高台の断面は箱形を呈するものが多い。

4. 中世後半期

中世後半期（15・16世紀）の資料もこれまた少なく、会津地方では16世紀代の資料が大半を占める。県内全体を見ても、確実に15世紀代といえるような資料は少ない。

会津地方では高堂太遺跡出土資料が該当する。高堂太遺跡の資料は全体形が不明であるが、体部内外面が赤色系漆、高台部外面が黒色系漆の資料である。この漆器は下高館跡の掘立柱建物跡の掘形埋土から出土しており、共伴遺物はないものの建物自体は14世紀後半～15世紀中ごろに比定されている（福島県教育委員会2007）。この外面赤色・高台部黒色系漆の資料は県内ではあまり良好な共伴例がないが、上越市水久保遺跡から椀と櫛子とともに珠洲Ⅴ期の鉢が共伴している（新潟県教育委員会1996）。このことから高堂太遺跡も15世紀前半の年代と考えられる。この高台部のみ黒色系漆を用いる赤色系の漆器は他時代にはほとんど認められず、概期の特徴と思われる。

総じて、15世紀は14世紀同様、内面赤色系漆が主体を占めるようであるが、内外面赤色系漆の漆器が出現する。また、高台部のみに黒色系漆を用いた漆器が登場する。なお、水澤が15世紀の指標とした内面見込みに段を有する漆器（水澤2007）は福島県内では管見に触れない。出土例そのものが少ないので判然としないが、その様相が異なっていた可能性が示唆される。

16世紀代の資料としては、元屋敷遺跡の資料が挙げられる。館の堀からの出土で、もっとも残りのよい椀は内外面黒色系漆で体部から直立気味に口縁部に至る器形で、高台部は厚く、僅かに凹む。図示されている4点のうち、内外面黒色系漆の資料が1点、外面黒色・内面赤色系漆が2点、内外面赤色系漆が1点である。高台の高さは低い。共伴遺物は明らかでないが、15世紀後半から16世紀にかけての年代観を示す染付皿やかかわらけなどが出土している（三島町教育委員会1992）。ただし、内外面黒色系漆の資料はその器形から判断すると16世紀代以降の近世椀に類似することから、本期に包括した。なお、伝世資料としては永正12（1515）年銘を有する西会津町真福寺の総黒色の尊式華瓶や会津若松市八角神社の内外面赤色系漆の華瓶（室町期）などがあり（会津若松市2003）、その出現時期は判然としないが、遅くとも16世紀には一定量の総赤色漆器の流通が認められる。

会津地方以外では、前述の荒井猫田遺跡の「北の町」の資料や河股城跡、梁川城関連の茶臼山北遺跡などで概期の遺物が出土している。

荒井猫田遺跡の館Bにともなう内堀（17号堀跡）の資料はこれまた時代幅が認められるが、遅くとも15世紀初頭に構築され、主体は15世紀末～16世紀後半である（郡山市教育委員会2002）。

河股城跡はⅡa区第15平場から良好な資料が出土した。高台の厚みが2cmと非常に厚い椀が主体を占めるようになり、皿の大半は蓋になると考えられる。白木の挽物皿や鉢なども出土したが、漆液容器に使われている。図示された25点のうち、外面黒色系・内面赤色の漆器19点、総黒色が4点、総赤色2点となる。時期的には16世紀中葉～17世紀初頭と考えられている（川俣町教育委員会2002）。

5. 近世初頭

17世紀の漆器は若松城下で多く出土している。城東町遺跡の6号不明遺構は志野丸皿・唐津角皿などととも、漆器が24点出土した。器種的には椀が大半を占めるが、蓋や片口鉢もおのおの1点が認められる。塗装は外面黒色系漆・内面赤色系漆が19点と最も多く、次いで内外面黒色系漆が3点、内外面赤色系漆が2点となる。椀の器形的には口径10cm前後の小椀、唐津や志野などの碗を模倣した体部下半から口縁部にかけてほぼ直角に立ち上がる椀、肥前などを模倣した体部下半から内

湾する碗などが認められ、高台は前代同様1cm程度の厚さを有するものが多い。共伴遺物から16世紀末～17世紀前半の資料となる（会津若松市教育委員会1994b）。また、前述の河股城跡では17世紀初頭の黄色漆・青漆や蒔絵蓋の資料が出土している（川俣町教育委員会2002）。なお、青漆漆器は神指城でも外面青・内面黒の蓋が出土している（福島県教育委員会1992a）。概期に蒔絵の漆器碗が本格化した可能性を有する資料となろう。

6. 刳物の材質

材質は、その大半が樹種同定されていないため不明なものが多い。古代に属する矢玉遺跡ではトチ、中世初頭の陣が峯城跡ではケヤキ、御前清水遺跡ではトチが大半を占める。13世紀代の内屋敷遺跡ではヒノキであった。これに対して、15世紀末～16世紀の元屋敷遺跡の資料はブナ・カツラ・ホオノキ、16世紀代の河股城跡や17世紀初頭の城東町遺跡は45点中39点がブナであった。仲田はケヤキなどの堅い材から柔らかいブナへの材質の移行は、16世紀前半に転換され、ブナの木材的特性ゆえに厚ぼったい器形になると説いた。それに対して水澤は15世紀に模倣とした青磁碗の流通量が16世紀に入ると激減したために採用されたと説いた。ブナ自体は御前清水遺跡の荒形などでも散見され、中世前半期でも客体的に存在することや、基本的に漆器は陶磁器をモデルとしていると考えられることから、後者がより可能性が高いであろう。

7. 画 期

第一の画期は9世紀となろう。緑釉・灰釉陶器模倣の刳物皿や越州窯系青磁碗模倣の碗など白木もしくは総黒色系の漆器が出土する。概期は会津地方で在地豪族による開発にともない、集落が増加する時期である。それに比例して出土すると考えられる。材質はトチを主体とする。

第二の画期は12世紀代～13世紀にかけてである。おそらくは11世紀に成立するかわらけ成立期の時期となろうが、現状では出土例がないため判然としない。12世紀は前代とは大きく異なり、碗を主体とする。これに対してかわらけは皿を主体とすることから、両者の補完関係が認められる。いずれも総黒色系漆で、碗は体部が開く器形が多く、高台部は厚ぼったい作りである。

これに対して13世紀代に入ると、碗の大半は前代より丸みを有するようになり、なおかつ器壁は薄く作らようになる。また、漆絵が描かれた漆器が出土するのも特徴である。このように12世紀と13世紀の漆器は器形的にも大きく異なり、ここに画期が認められる。

第三の画期は16世紀となろう。高い高台で腰高の碗など、その器種も3種類に大別されるようになる。また、総赤色の漆器も主体を占めないが、一定量認められるのが特徴であり、青漆や黄漆などの資料が登場する。材質もケヤキなどの堅い材からブナなどの柔らかい材に移行する。総じて会津若松城下など17世紀代に系譜がつながる漆器が多く、四柳・仲田・水澤も説くように、近世的な漆器が成立する（四柳1995・仲田1999・水澤2007）。

以上、会津地方における挽物・皿の変遷について概観したが、出土例が少ないため大まかなものとなってしまった。また、その製作技法や塗装技術などは述べるができなかった。今後の課題にしておきたい。